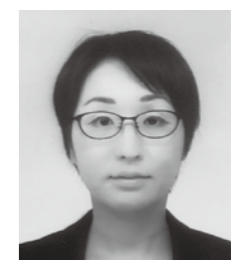


私にも 言わせて! 第98回

転機は出産・育児で受けた 頼もしい行政サービス 日々奮闘し、同僚とともに成長



広島市安佐北区厚生部
地域支えあい課
地域支援第二係 医師
石崎 宏美

平成22年広島大学医学部医学科卒業。同年広島大学病院初期研修医となる。24年広島大学放射線診断科へ入局。25年広島市市民病院放射線科、27年広島市市民病院放射線診断科、28年JA広島総合病院画像診断部を経て、31年4月広島市役所に入職し、広島市南区健康長寿課保健予防係に配属。令和2年4月より現職。

平成31年4月から、公衆衛生医師として広島市の保健センターに勤務しています。以前は、放射線診断医師として病院に勤務していましたが、紆余曲折(?)を経て、公衆衛生の世界に思い切って足を踏み入れました。まだまだ慣れないことや勉強不足なことばかりですが、日々新鮮な思いで業務に当たっています。

広島市に入職するまで

私はもともと、自分が公衆衛生医師になることは想定していませんでした。というのも、学生時代から自分は将来臨床医になるんだろうと漠然と思ってきたため、公衆衛生や疫学としっかり向き合っていた勉強したのは学生時代や医師国家試験のときくらいでした。卒業後も、放射線診断科に入局して以降、10年弱は病院でひたすら画像やカテーテル、穿刺針等と格闘する日々でした。私が所属していた科では、自科で入院患者を主治医として担当することはほとんどな

く、患者さんと直接接するのはVRや、造影剤の副作用発生時、脳ドックの結果説明のときくらいのものでした。日常業務で、患者さんと直接接することは他の科に比べると格段に少なく、公衆衛生を身近なものとして意識する機会もあまりありませんでした。

ただ、大学時代の友人が一時期、公衆衛生医師として広島市で勤務しており、たまに会ったときに、公衆衛生医師の業務内容について具体的な話をちょこちょこ聞く機会がありました。そのときは、病院以外でもいろいろな働き方があるんだな、と思っていましたが、

いて実地で体感し、多くのことを学ぶことができました。今思えば、新人のうちに、とても貴重な経験を積むことができたと思います。

その後は、結核やその他感染症、乳幼児健診など、さまざまな分野の研修に参加したり、先輩医師にお薦めの文献や資料を教えてくださいだいたり、また直接ご指導いただいたり、区民や学生向けの健康教育ではどういったら関心を持って聞いてもらえるのかを工夫したりと、自分なりに公衆衛生について勉強・試行錯誤しながら日常業務に当たってきました。

乳幼児健診については、最初の1年間は小児科医師にご指導いただきながら経験を積むことができ、



昨年のPPE着脱訓練の風景
(この数か月後、新型コロナウイルス感染症発生...)

非常に心強くありがたかったです。また、家に帰ってから、わが子で健診の練習をして、家族から怪しまれたりしたこともありましたが、(苦笑)。
現在は、1年目とは別の区に異動し、新型コロナウイルス感染症対応に毎日追われています。区民の方向けの健康講座が延期になったり、乳幼児健診も個別健診に変更になったりと、新型コロナウイルス感染症以外の業務がなかなか思うように行えない現状です。



新型コロナウイルス感染症など思いも寄らなかったころ

新型コロナウイルス感染症については、患者発生に伴う業務のほか、地域の医師会とも委員会等を通じて情報共有や意見交換などを行い、行政と現場の医師がより円

実際に自分がその領域で働くことは、ほぼ想定していませんでした。転機となったのは、長男を出産後約1年の産休・育児を取得したときです。産後の保健師訪問や、乳幼児健診、予防接種と、さまざまな行政サービスを利用する機会を得て、病院以外にも行政が健康づくりに重要な役割を果たしていることを体感し、新米の母親として、とても心強く感じました。その後、職場復帰し専門医の資格を取得したものの、育児との両立や放射線診断科医としての自分の在り方に迷いが生じたこともあり、また、ちょうど広島市のホームページで公衆衛生医師の募集情報を見つけたことから、悩んだ末、公衆衛生医師に転職しました。

公衆衛生医師として

広島市の公衆衛生医師になり、今年度で2年目を迎えました。病

滑に連携して対応できるよう努めています。お互いが日頃感じている疑問点や意見、要望を直接やりとりしたり、情報共有することで、信頼感や連帯感が強まることを感じたりもします。若輩の私は、その場で教わることの方が多いため、行政医師の一員として、少しでも地域医療の一助になれば、と思います。

今後について

原稿を書いている現在(令和2年10月)は、新型コロナウイルス感染症の収束のめども立っておらず、対応に追われてばかりで、今後の見通しというのも難しい状況です。ただ、個人的な当面の目標として、社会医学系専門医や産業医資格の取得を考えています。幸い、昨年に、大学時代の同級生が市の公衆衛生医師として新たに入職し、頼もしい同期が加わりました。お互い助け合って(向こうがしっかり者なので、私が頼ることが多いかもしれませんが)、公衆衛生医として一人前になれるように切磋琢磨していければ、と考えています。

「期待の若手シリーズ 私にも言わせて!」は、
全国保健所長会ホームページに
バックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会 月刊公衆衛生情報 で検索してください

http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushusei_watashi.html

院勤務時代とは環境も仕事内容もまったく異なり、我ながら思い切った決断だったと、今さらながら感じます。
私がまず配属されたのは、広島市内(8区管轄)の保健センターでした。区保健センター医師は各区1名ずつ配置されているため、同僚は保健師さんがほとんどでした。他の区の先輩医師や同僚保健師さんに一つ一つ業務を教わりながら、何とか日常業務をこなす日々でした。

しかし、入職して約2か月後、市内で麻疹の集団発生が起こりました。特に、私の配属区では行政検査依頼も多く、医療機関や市民からの相談対応、受診調整、疫学調査など、収束するまで毎日ドキドキしながら対応に当たりました。このときに、重大感染症発生時の基本的な対応、他の保健センターや医療機関との連携の重要性につ